

松陵

秋田県立能代高等学校同窓会
事務局
〒016-0184 能代市高塚2-1
能代高等学校内
TEL 0185-54-2230
FAX 0185-54-2231
題字は神馬前会長

「同窓会会員の皆様へ」



同窓会長 田中 仁 純
(第二十五期)

テロと不況の不透明な二〇〇一年も残すところわずかとなりました。皆様にはご健勝にてお過ごしのことと存じます。今年是小泉内閣の構造改革の年といわれており、日本社会の根底から大きな地ひびきをたてて変わろうとしています。我が能代高校も七十五周年もすぎ、次の八十周年にむけて邁進しております。

皆様お気づきのことでしょうが、同窓生の絆でありますこの「松陵」も大きく変わりました。数回の会議を重ねてまじこのようなタイプの会報になりました。同窓生の記事を出るだけでなく、また恩師の記事も多くとりあげたいと思っております。

皆様にも在校中のエピソード

や、卒業後の仲間との交流等どしどし投稿していただき、内容をもりあげていただき、内容としておりますのでよろしくお願ひ致します。

とにか「松陵」の届くのが楽しみです。

さて、山田久志さんが中日ドラゴンズの監督に就任され、今後の活躍が期待されます。我々同窓生も彼が監督の席にあるうちだけでも巨人ファンをやめて応援しようではありませんか。

八十周年も四年後に来ます。いまから費用の積立てをしたいと思っておりますので、会費の納入も格段のご高配をお願い致します。皆様のご多幸をご祈念申し上げます。



本校同窓会長を六期十二年という長期にわたって務められた神馬恒成氏が、十一月二十四日午後六時三十七分心不全のため能代市内の病院で逝去されました(享年八十二)。

神馬恒成氏のご逝去

氏は青森県岩崎村のご出身。名古屋帝国大学医学部を卒業され、昭和三十九年に能代市内に神馬医院を開業されて以来、広く医療活動に携わられました。昭和五十九年からは能代山本医師会病院長を務められたほか(現同会名誉会長)、県医師会副会長、県公安委員長等を歴任、各方面にわたって多大なる功績を残されました。本校同窓会においては昭和六十二年から平成九年

年まで会長を務められ、在任期間中には雨天体育館の建設や学校の前庭整備等に尽力されました。また、同窓会費の徴収システムを整備されたのも氏の功績の一つであり、これにより会の財政基盤が整ったことは言うまでもありません。

「松陵」第十号には、同窓会長退任にあたっての談話が掲載されております。その中で氏は在任中の思い出とともに、将来的には同窓会として多くの示唆に富むお話をなさっています。

ここに、氏の生前の輝かしい活躍を讃え感謝の念を捧げるとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

本校OB (第三十七期)

山田久志氏

中日ドラゴンズ監督に就任

野球人生の集大成に

第二十五期 太田 久

本校OBで、今シーズンまでプロ野球中日ドラゴンズでヘッドコーチ兼投手コーチを務められていた山田久志氏が、この度星野仙一監督の後を受けて同球団監督に就任しました。秋田県出身者のプロ野球チーム監督就任は戦後初のことであり、戦前を含めても二人目という快挙です。

山田君は、命がけて目標を成し遂げようとする男。監督としての資質を十分に備えているのだから、失敗を恐れるよりも、自分を信じる心が大切だ。頑張れと言いたい。

現在同氏は、秋季キャンプ・ドラフト会議を終え、来季のチーム編成の真つ最中です。先日のドラフト会議では超高校生右腕寺原(日南学園)の交渉権は得られなかったものの、有望新人選手を多く獲得し、将来を見据えた選手補強を行いました。

高校時代から読書家だった広い人間性が生かされると期待している。野球人生の集大成として、一年一年大事に過ごしてほしい。

山田監督からはいずれ同窓生にむけてのメッセージを頂きたいと考えております。来季からの活躍を心から期待したいと思います。

高校二年の夏の県大会は、三塁手だった彼のエラーで負けたが、新チームでは悔しさをばねに、素晴らしい投手に成長し活躍をした。

柔軟な思考と、とき澄まされた感性で若手を大きく育て、山田カラーを出すことだ。県内野

球ファン、双手をあげて応援するだろう。

能代高校同窓会 新年会のご案内

日時/平成十四年一月二十五日(金)

受付 午後五時より
講演会 午後五時三十分
講師 太田 久氏
演題 「今想う高校野球」
懇親会 午後六時四十分
会場/料亭「金 勇」
能代市柳町

電話五五―三三五五
会費/四、〇〇〇円(当日持参)
*今回の当番幹事は、三十二期(新制十三期)と四十一期(新制二十三期)です。

*参加申し込みは、各期幹事または左記へご連絡ください。
申込締切 一月二十一日(月)

能代高校事務局(能代高校内)
電話(〇一八五) 五四―三三三〇
FAX(〇一八五) 五四―三三三二

恩師探訪

幻の「同窓会報」

長岡 幸作先生

(旧制十二期)



旧職員と同窓会役員記念写真(昭和40年 於・西福寺)
前列左より 小竹先生、藤田成治、武藤初代校長、高柳校長
後列三番目 吉武同窓会長、太田口先生

会長をはじめ役員との会談中に「創立三十八周年を迎えても「同窓会報」もなく、たくさんの方々に能代高校と同窓会の現状を知ってもらおう」と創刊しようとした。九月二十三日に発刊することになりました。

吉武栄一会長(一期)の「発刊のことは、高柳信一校長(十五代)の「創刊に寄せて」に続いて武藤健三郎初代校長の「祝創刊」、加藤正一前学校長の「同窓会各位に」と

私が十年間の能代高校在勤中、同窓会幹事として、前半は六期生の吉武栄一先生、後半は二十一期生の統隆先生と共に勤務しました。同窓会報十二号の発刊にあたり、原稿依頼を受けましたので、三十八年以前の幻の「能高同窓会報」について紹介します。当時の吉武栄一同窓

なっている。小竹寛治旧職員(英語担当)、潮田潔七代校長、牧野副会長、吉武栄一先生、東京支部長腰山己代治氏の「欧州とびある記」、小野喬氏の「東京オリンピックへの道」等記録されている。「同窓会役員名簿」に続いて同窓会員が一期期待している「同窓会各期だより」

「東京支部だより」等満載されている。武藤初代校長の「祝創刊」には開校当時の苦勞話を書いている。

「大正十四年二月旧制能代中学校に赴任したが、当時予算がないため事務の人も、教務の人もない、只一人県庁の一部を借りて仕事をはじめから約八年、不毛に等しい校地に教育環境を作り、校具、教具一品一品の整備、教育内容の充実、今思うと、当時吹けばとぶ位の予算で苦心したので、私にとって一生の思い出の学校である」。学校案内では昭和三十八年には、野球部創設以来の全県制覇と待望の甲子園出場の「特集」となっている。一回戦は長浜北高を12対1で大勝し、西宮球場に校歌の吹奏とメーンポールに感激の校旗の掲揚は一生忘れることのできない感激だったと記している。二回戦は、岡山東商と対戦し、簾内投手の故障で5対1で敗れているが、後輩に自信を持たせたと称賛している。体操部も戦後十二回の全国制覇の栄冠を獲得したが、この大会が体操部最後の全国優勝となつて残念でならない。バレー部も全県優勝し全国大会に出場して予選大会では佐賀工高を2対0で下したが決勝一回戦では崇徳高に2対0で惜敗している。



当時の同窓会報の題字

同窓生から……

青春のふるさと



今村 正 (旧制十三期)

旧制十三期生は、毎年一回九月初旬に同期会を開いている。総会開催前に、中学時代の思い出の地を訪問する。集合場所は樽子山の中央公民館(旧能中跡)とこだわっている。

今までに、母校参観・火力発電所・風の松原・松山城址などへ行つた。本年と昨年は見学をやめて、懇親会終了後、引き続き「おなごりフェスティバル」を観覧した。

それから「十三期の集い」という会報を出している。年三回発行するが三十四回を数えた。三十五号は来年一月発行予定で、編集発行は小生がやっている。

淡路会長はフェスティバルの座席を確保してくれるし、秋田の伊藤氏は出席者全員に、当日の見学地やスナップの写真集を寄贈してくれる。もう五冊になった。飲めばすぐ中学時代にかえる。母校は青春のふるさと。この思いはだれしも強い。

能南高跡地

「青春」碑の前に佇みて



山田 芳男 (第二十二期)

昭和二十年八月、終戦。能中一年の時だった。当時物資は極度に不足していた。長根町の仮校舎は廃屋同然のボロ校舎で、窓ガラスは大部分破損。ベニヤ板で窓を塞いでいた。ガラスは貴重品だった。昭和二十三年、樽子山に校舎が新築された。敗戦直後の貧窮と失意の中での快事であった。杉の香の校舎であった。盗難防止の為、全てのガラスに「能中」の文字が刷り込まれた。校舎全体が「能中」に埋めつくされた。陽の光に照らされた「能中」は、キラキラ輝いて見えた。壮観な眺めだった。校庭から眺めるこの光景が、何故か好きだった。その校庭で能中健児達が、選手を励まし高唱した。潮騒さゆる北海のノ岸のほとりに地を占めて。気分は高揚した。

同年九月、南高校校舎の落成式が挙行された。

今、能代南高校跡地、巨岩石碑「青春」の前に佇み、五十数年前に想いを馳せている。

われらの「ひとみ会」



中村 百 希
(第三十一期)

私が母校を卒業したのが昭和三十六年なので、すでに四十年の月日が過ぎております。

振り返ってみると母校に係わる思い出が沢山あるのですが、今回は母校という旗の下に昭和四十九年から今も集まり続けている私達の会を簡単に紹介します。

この会のメンバーは秋田市に住む同期生の有志十三名(現在は十二名)で構成されて、名称は新制十三期に関連してひとみ会と付けた。

毎月の十三日に居酒屋に集い、ワイワイガヤガヤの中に親睦と情報交換し、併せて無尽講(一人毎月一万円掛)を行ない、会員の互助に寄与している。

また、平成元年からは年二回のゴルフコンペを開催し、最近では先輩や後輩を誘い、まるで母校の秋田支部同窓会のコンペのように多数参加して賑わっている。

来年は、私達も還暦を迎えることになるが益々仲間意識を強くして元気に活躍したいと思っている。

最後にこの会の会員名は次のとおりです。(会長 大山 麻木、伊藤 浦島、大淵 佐々木、清水、須藤 瀬川、中村、島山、福田)

「恩師と言えり 二人の先生」

伊藤 良 弘
(第四十一期)

高校生活。それは三十数年前の事だが、プラタナスや桜の木々に囲まれた樽子山での出来事が鮮明に浮かんできます。とりわけ三年時は、十里強歩の復活や学校祭での有志企画が認められるなど、社会的風潮と相俟って、新しい自立への動きが感じられる一時期であったかもしれせん。

そんな中で思う事は、恩師の先生との出会いです。一人は、担任であり数学のT先生。私たちとそれほど年令も違わない熱血先生は、激怒の場面数々あれど、実は優しさの裏返しだったのです。又、正義・律儀を重んじながらも、なぜか応援団には厳しかった英語の故S先生。この先生も、人一倍愛情を注いでくれました。他人の痛みがわかり、最善を尽くす事の大切さを伝えようとした二人の先生との出会いは、今の私の、目に見えない大きな支えとなつています。

今の私の原点



河 田 康 史
(第五十一期)

「巨濤二十二号(七十九年)」の奈良の修学旅行の私の紀行文を改めて読んだ。「身分差別」や「権力への嫌悪感」を記した

拙文だ。当時の社会科の恩師が、明確なことはではなく、比喩や挿話を交えた形で授業の端々(授業とは直接関係なく)で教えてくれたことは「権力の恐ろしさ」だった。そういう中で書いた文章だった。

思えば、高校時代は生徒会活動を通して、授業より学校行事に勤しんだ。甲子園球場での応援で、先輩らの見事な組織力を学び、深夜の十里強歩では同級生との疲労困ぱい時の結束力、そして能高祭。一体となって目的に向かって汗を流す苦勞と喜びがそこにあつた。一つ一つが社会人になつた今につながるものだった。

あの拙文から二十二年目の今秋、同じ奈良の道を歩いて確認した。あの時、少しマスコミ批判をした私が今、一ジャーナリストとして生活している種は、能代高校時代にまかれたのかも知れない。

「松陵のころ」



丸 山 範 子
(第二十四期)

茶色で手に持つとバラバラと頁が落ちてくる数冊の「松陵」が私の本棚にある。

私の高校生活はこの「松陵」を中心にまわっていた。その当時「松陵」は能高文芸誌だった。第一期の女子生徒だった私が文芸部に入った時の驚きは大きい。大人の風格を具えた上級生が「メカニズム」「アンチロマン」「シニウルリアリズム」などわけの分らないことを言い合

っていたり、又その作品も例えば土橋尊雄さんの俳句(犬殺し春の吹雪の彼方に消ゆ)など読んで、私の考えていた甘い空想は吹き飛んでしまった。分らない。分らない。分らない。そんな部

支部だより

◎東京同窓会



事務局長 八柳昭義
十月五日東京野の日本閣にて総会を開催、招待者、新卒招待者を含め百五十二名が出席し盛会のうちに無事終了しました。

又、任期終了のため、幹事会にて役員改選を行い、次の方々を選任しました。

- 会長 島豊彦(新七期) 副会長 島山信孝(新八期) 関根市男(新十一期) 磯部博(新十四期) 高田政勝(新十四期) 庄内正(新十六期) 干場革治(新十七期) 若狭秀巳(新十九期) 菅原涉(新二十一期) 三浦洋(新二十七期) 監事 大久保征輝(新十期) 事務局長 八柳昭義(新八期) 事務局の住所も都合により、自宅に変更しましたのでご了承下さい。

東京都中野区本町四一八一十六番 東京同窓会が能代五高会を組織して交流しており、お互いの総会に招待されて出席し、交流しています。又、毎年十二月第一土曜日に、五高会が主催して、郷土の味「ヤツメとキリタンポの集い」を開催し、鉦漬け、はたはたのすし、かすべ、などを能代から送って貰い、東北

活が勉強そつちのけで私をとりこにした。現在私が詩集など出すようになった根はこの分らない魅力にあつたと言えり。現在の文芸部の方たちも矢張り分らないものの魔に魅入られているだろうか。

◎鷹巣阿仁部同窓会

初同窓会
田中三天(第二十七期)



鷹巣阿仁部同窓会が十一月十七日、鷹巣町の創作郷土料理米沢屋で開かれまして。平成五十年に開催して以来のことで、

しかも能代北高校鷹巣松陰会(北島洋子会長)との初めての合同同窓会となりました。合わせて約四十人が出席。大先輩で、長く政界で活躍した元参議院議員の佐々木満氏が「わが青春に悔いなし」と題して講演、「最近の日本は強者の論理がまかり通って、弱者に思いを寄せる古き美德がなくなつた」と強調し、参加者に指針を与えました。このあと北島会長の音頭で乾杯。和やかに歓談したほか、「そのかみ通か!」「山紫に!」と校歌を歌い合うなど、しばし、紅顔の美少年・少女に戻っていました。能代高校からは越後美緒子教頭が出席して下さいました。

母校は今……

「21世紀、能代高校は……」



校長 阿部 正博

会員の皆様には、日頃から母校の教育振興にご支援いただきありがとうございます。

四月に清野校長の後任として、秋田高校から転任してまいりました。着任早々から、たくさんの方の皆様に励まされ、たくさんのご助言をいただき感謝いたしております。

皆様の期待に添えますよう、21世紀を担う青年の育成のために生徒のやる気を引きだし、充実した高校生活ができるよう努めています。また、文武両道と①人格の形成（克己誠実）②学力の充実（自発学習）③心身の健康（部活精励）の教育目標の達成をめざしています。生徒一人ひとりを大事にして、先生方と共に授業を中心とし行事や特別活動を通じて指導にあたっております。

輝かしい先輩の実績を乗り越えるべく、三年生は自己実現のための最後の追い込み、一年二年生は勉学と部活動の両立

デイベート

甲子園に

参加して

井論部 袴田 金生 (三年F組)

◆デイベートとは

デイベートというものは、一つの論題について肯定・否定に分かれ、制限時間内に理論の正当性を主張し合うものです。

「立論」「質疑」「第一反駁」「第二反駁」を経て、最終的にジャッジを納得させた側が勝利となります。よって、時間内にジャッジを納得させることこそがデイベートの鍵であり、これまで話した方には相当な注意を払ってききました。頭の中に図を描き、センテンスを短くし、間や強弱を用いて、言葉のみで表現するということから、様々な話し方のコツも学ぶことができました。

◆我が部の活動内容

デイベート甲子園という大会があり、まさに文化部の甲子園と言えるものが夏に行われます。この大会への参加が我が能代高校デイベート部の主な活動です。毎年、全国高校デイベート連盟より全国一律の論題が発表され、この共通論題のもと約百二十校の高校生が全国優勝を目指します。

◆今年の成績

ところで今年の論題は「日本は道州制を導入すべきである。是か否か」というもので、本校は東北大会を見事突破し、全国大会に出場することができました。「地方分権の推進」という

進路状況一覧

最近4年間の進路状況

平成13年4月最終集計

種別	卒業年		平成13年3月		平成12年3月		平成11年3月		平成10年3月					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女				
卒業生総数	163	115	278	177	94	271	164	124	288	175	114	289		
大学短大進学	国立	大	60	38	98	58	42	100	67	33	100	35	31	66
		大	58	42	100	67	30	97	57	48	105	76	40	116
	公立	短大	2	3	5	0	1	1	0	6	6	1	8	9
		短大	3	4	7	1	4	5	1	6	7	0	6	6
小計	123	87	210	126	77	203	125	93	218	112	85	197		
専修学校・各種学校等への進学	男	20	16	36	18	11	29	16	13	29	22	18	40	
	女	4	1	5	5	1	6	7	2	9	16	1	17	
就職者	男	16	11	27	28	5	33	16	16	32	25	10	35	
	女	11	11	22	5	16	16	16	16	16	16	16	16	
未決定者(その他を含む)	男	163	115	278	177	94	271	164	124	288	175	114	289	
	女	115	115	230	94	115	209	124	114	238	114	114	228	

常に目標は高く、来年こそは全国優勝。有望な後輩達、冷静ささえ欠かなければそれも夢ではありませぬ。

◆現状

能代地区ではデイベートが盛んで、中学生の頃から全国大会に出場している者が多く、この部を創設した先輩方も現部員も大半が全国経験者であり、先輩方にはOB兼コーチとして今でも助言をいただいています。ですが、練習を欠かすことはできません。大会のない時期でもほぼ毎日、部室で模擬デイベートを行い、実力を養っています。



(第6回デイベート甲子園東北地区予選)

部活動の記録

「文武両道」を教育目標とする能代高校生は、今年度も各分野で活躍を示し、心身の鍛錬に励みました。

今年度の運動部・文化部の活動状況の概略をご報告いたします。文章内の番号は、以下の大会の種類を表しています。(なお、個人成績は紙面の都合上、各部から特筆すべき成績のみを報告していただきます。)

- ①平成十三年度春季県北総体
- ②同春季全県総体
- ③同東北総体
- ④国体・インターハイ
- ⑤その他

運動部の活動状況

硬式野球部

- ①二回戦敗退
- ②甲子園予選ベスト8

軟式野球部

- ①優勝
- ②シードのため出場せず
- ③奥羽大会ベスト4

ソフトテニス部 (男子)

- ①団体三位
- ②団体三回戦敗退
- ③塩谷・三村組出場
- ④三村出場 (団体二回戦)

ソフトテニス部 (女子)

- ①団体二回戦敗退

- ②団体一回戦敗退
- ⑤県北一年生大会
平川・武藤組準優勝

サッカー部

- ①三位
- ②三回戦敗退

山岳部

- ①男子A一位 女子B一位
- ②女子A三位

バスケットボール部

- ①ベスト8
- ②二回戦敗退

バレーボール部

- ①予選リーグ (二勝二敗)
- ②一回戦敗退

卓球部 (男子)

- ①団体一回戦敗退
- ②団体二回戦敗退

卓球部 (女子)

- ①団体一回戦敗退
- ②団体一回戦敗退

柔道部

- ①男子団体 優勝
- ②女子団体 優勝
- 個人優勝男子六人
- 個人優勝女子六人

- ②男子団体 準優勝
- 女子団体 優勝

個人優勝

工藤 秀樹 (81kg級)
菅原知佳子 (63kg級)

- ③個人三位 伊藤 春奈 (78kg級)
- ④個人三位 菅原知佳子
- ④個人三位 伊藤 春奈
- ④団体女子 予選敗退
- 個人 工藤秀樹(ベスト16)

剣道部

- ①男子団体 優勝
- ②男子団体 準優勝
- ②男子団体 予選敗退
- 女子団体 ベスト8

剣道技術優秀選手賞受賞

佐々木祐輔
小笠原咲子

陸上競技部

- ④走高飛び九位 野呂裕太郎

水泳部

- ①100m背泳三位 石岡真裕
- ②100m背泳八位 石岡真裕
- ③石岡真裕100m背泳予選出場

空手道部

- ①男子団体組手三位
- ②女子団体組手一位
- ③女子団体組手二位

個人組手 梅田夕子出場
藤田怜美出場

女子バレーボール同好会

- ①二回戦敗退

秋田県文芸コンクール
全国文芸コンクール

短歌部門第一席
短歌部門優秀賞

「夏服群像」

工藤 絢子 (三年D組)

脱走を試みる私のテーブルに朝のスープは沸騰している
吸い込んだ肺の痛みと君の眼に揺らめいている廃材置場
生命線その他絡まるてのひらに刃を押し当てて薄闇の落つ
ガード下とべない羽は捨ててきた 口笛で吹く「ギミー・シェルター」
抱きながら抱かれている七月の雨に震える猫の体温

- ②二回戦敗退

体操部

- ②個人総合優勝 平川雄貴
- ③個人総合五十二位 平川
- ④個人総合一〇二位 平川

文化部の活動状況

演劇部

- ・県北地区高校演劇合同発表会
- ・能代山本地区高校演劇秋季コンクール 最優秀賞
- ・全県選抜高校演劇発表会 優秀賞

吹奏学部

- ・秋田県吹奏楽コンクール 県北地区大会 銀賞
- ・第三十九回定期演奏会(九月)

写真部

- ・秋田県高校写真連盟展 入選 一名
- ・能代山本地区高校写真連盟展 特選 八木 尋子
- ・入選 三名
- ・佳作 二名

・秋田県高校総合美術展
推奨 田村 陽子

・推奨 工藤亜沙子
・推奨 田畑 俊英

- ・高文連写真部門県北支部展 入選 四名

美術部

- ・秋田県高校総合美術展
- ・アサイン部門推奨 大淵 裕

放送部

- ・秋田県高校放送コンテスト 朗読部門優秀賞 佐藤愛美
- ・秋田県高校放送コンクール 朗読部門入選 成田 巧
- ・アナウンス部門入選 平塚昌子

茶道部

- ・能高祭お茶会参加(六月)
- ・おなごり茶会参加(九月)

書道部

- ・秋田県高等学校総合美術展 入選 七名

無線部

- ・高文連無線部門方向探索競技会 七位 戸松 友(全国大会出場)

JRC

- ・各種ボランティア等多数参加

文芸部

- ・県文芸コンクール 短歌部門第一席 工藤絢子
- ・全国文芸コンクール 短歌部門優秀賞 工藤絢子

囲碁将棋部

- ・高校囲碁選手権秋田県大会 団体戦 準優勝

弁論部

- ・デイベート東北大会三位
- ・全国デイベート選手権 予選通過

能代高校校歌のいよ

小野 信 継 (第三十五期)

ここに母校の校歌成立について書こうと思います。校歌についてはすでに今福先生の記事(能代中学校校友会誌第二号・昭和六年三月発行)と秋元前校長先生の松陵第九号(平成九年十二月二十日)でほぼ語りつくされている、と思います。お二人の記事から校歌成立の経緯は概ね以下のようになります。

学校教授の岡野貞一氏に藤村先生から特にお願ひしてくださって今のような立派な歌詞と曲、かみしめればかみしめるほど妙味津津たるものができたのである。(二部文章を省略させていただきます)

私はこの文章を読み疑問が一つありました。曲も先生のお知り合いの岡野貞一氏にお願いをしてくださった、とあるのですが、藤村先生と岡野先生はどんなお知り合いだったのだろうか? 私は岡野先生が小石川にお住まいだったので、東京大学勤務の藤村先生とはお住まいが近くだったのではないかと勝手に想像していたのですが、実はそうではなくて、調べていくと意外なところにお二人のつながりがありました。

このつながりを見つけたのは藤村作著の八恩記を読んだ時でした。そこには藤村先生の略歴が書いてあり、先生は東京大学の(助)教授時代に東京音楽学校に講師として出かけられていた事が書かれていました(明治四十三年以後)。ということとは東京音楽学校の(作曲の)先生と知り合う機会には十分にあったと考えられます。

さらに藤村先生の奥さん(季子さん)は東京音楽学校を卒業された方で(専門は声楽か?)明治三十四年に藤村氏と結婚されております。即ち藤村先生は音楽学校の先生の中に面識のある方がたくさ

んいた(のではないか)ということになります。ここで話は飛びますが文部省唱歌のプロジェクトの事を書かないといけません。

文部省唱歌は明治四十二年に数名の作詞・作曲の先生を委員としてスタートしました。この委員には高野辰之氏、芳賀矢一氏、上田萬年氏や尾上八郎氏、吉丸一昌氏などがいたのですが、芳賀矢一氏と上田萬年氏は藤村作氏の恩師。尾上氏、吉丸氏は東京大学時代の同期生。藤村先生との関係を図で示すと以下の様になります。



文部省唱歌で岡野貞一氏と高野辰之氏の二人はすばらしい作品を数多く残しました。

紅葉・秋の夕日に照る山紅葉、
臘月夜・菜の花畑に入り日薄れ、
ふるさと・兔追いかの山

などがそれぞれです。小鮎釣りしかの川

藤村作氏と高野辰之氏とは共に上田萬年氏を恩師とし、研究分野も共通する部分(浄瑠璃詞の研究、近松門左衛門など)があり、また高野さんのお嬢さんには藤村先生が結婚相手(藤村先生の教え子)を紹介する仲でした。

この様に文部省唱歌で作られた人間関係と、高野辰之氏と藤村作氏の仲を理解すると藤村先生はかつて高野辰之氏から紹介され面識のあった岡野先生に能代中学校校歌の作曲をお願いするため岡野先

生のご自宅に伺ったのではないかと考えられます。岡野先生の手により曲が完成し、楽譜は藤村先生にとどけられ、それから能代中学校に郵送されたのではないのでしょうか?

そして大正十五年九月十六日に校歌制定式、九月二十三日には新

校舎落成式典で校歌がたからかに能代中学校生により歌い上げられたものと思われれます。

(備考)藤村作詞、岡野貞一作曲の校歌は他に滋賀県彦根高等商業学校(現・滋賀大学経済学部)の校歌があります。

藤村作氏の略歴

- 明治8年 福岡県柳河町字坂本町に生まれる。(5月6日)
- 明治22年 城内小学校を経て中学伝習館に入学。
- 明治28年 熊本第5高等学校に進む。
- 明治31年 東京帝国大学国文科に入学。
- 明治34年 " 卒業後に第7高等学校教授。
- 明治36年 広島高等師範学校教授。
- 明治43年 東京帝国大学助教授。
- 大正11年 " 教授。
- 昭和9年 東洋大学学長になる。
- 昭和11年 東京帝国大学退官(勤続26年)。東京帝国大学名誉教授。
- 昭和13年 東洋大学学長を辞す。
- 昭和14年 国立北京師範大学名誉教授。
- 昭和28年 12月1日逝去。

注1: 業績を讃え藤村作顕彰会は柳川市の杉森女子高校を事務局としている。
 注2: 芳賀矢一氏、上田萬年氏、藤岡作太郎氏は東京帝国大学時代の恩師。
 注3: 東京音楽学校や日本大学、東洋大学、法政大学などで非常勤講師を歴任。
 注4: 武蔵野音楽大学創立者の福井直秋氏は大親友、武蔵野音楽大学の理事も歴任。

【藤村作詞・福井直秋作曲の作品】 燕 大正7年9月15日
 瀑布 大正7年9月15日
 花吹雪 大正11年9月8日

【役職】 紫式部学会会長(昭和7年)、国語教育学会会長(昭和9年) 日本文学協会会長(昭和21年)などを務める。

(参照した資料)
 物語 高野辰之 (星雲社)
 讃歌 ころの詩 (日本基督教団出版会)
 童謡・唱歌の世界 (教育出版)
 日本の歌ふるさと(歌) (春秋社)
 オルガンの文化史 (青弓社)
 八恩記 (杉森女子高校)
 郷土の文学 (杉森女子高校 国文科)
 福井直秋 伝 (武蔵野音楽大学 所蔵)

岡野貞一氏の略歴

- 明治11年 鳥取県邑美郡古市村に生まれる。(2月16日)
- 明治16年 公立 吉方小学校に入学。
- 明治25年 日本基督教団鳥取教会で洗礼を受ける。(9月25日)
- 明治26年 岡山市 私立協陽学院に入学。
- 明治28年 " 退学。
(アダムス宣教師に英才を認められて音楽の道に進むことを志す。)
- 明治29年 9月 高等師範附属音楽学校予科に入学。
- 明治30年 7月 " 本科に入学。
- 明治33年 7月 " 卒業。
(本郷中央会堂のオルガン演奏をカントレット氏から引き継ぐ。)
- 明治33年 9月 東京音楽学校研究科に入学。
- 明治36年 唱歌の授業を嘱託。
- 明治38年 東京音楽学校助教。
- 明治40年 12月 文部省 尋常小学校読本唱歌編纂員。
- 大正7年 文部省 小学校唱歌作曲委員。
- 大正12年 東京音楽学校教授。
- 昭和7年 " 退官。
- 昭和16年 12月29日逝去。

【役職】 同声会(東京芸術大学音楽部同窓会)理事長 日本教育音楽協会顧問を務める。

(人物評)
 小出浩平氏(大正10年東京音楽学校卒業 学習院大学教授)談
 岡野先生は極めて専断、敢てなクリスチャンであった。教授のかたわら本郷中央教会でオルガンを40年間弾いていたが誰にも自慢することもなく続けておられた。
 堀内かく氏(昭和5年東京音楽学校卒業 もと山梨高校音楽教諭)談
 岡野先生はとても温厚なお人柄で口数が少なく地味で気取らず誠実な方でした。怖い顔した面もありましたけれども、先生の温顔は今も鮮明に思い出され、敬慕しております。
 大井徳四郎氏(昭和6年東京音楽学校卒)談
 日頃は能面の様に表情を変えない先生の顔から折りにふれて喜びや悲しみを感じることがあった。